

ジベレリン液剤 ジベレリン協和液剤	取扱メーカー： ホクサン、住友化学 原体メーカー： 住友化学
成分： ジベレリン〔ジベレリン剤〕……………0.50%	性状： 比重0.8～0.9の淡黄色ないし淡褐色の特有の臭気を有する液体で水に容易に溶け無色透明な液体となる。 毒性： 普通物 消防法： 第4類・アルコール類・危険等級Ⅱ

【品目特性】……………

- ジベレリン協和粉末の項参照。
- 有効成分の特性は参考資料の「有効成分特性一覧表」を参照。

【使用上のポイント】……………

- 下記の表のように所定量の水に溶解すれば、希望濃度の水溶液をつくることができる。
- 使用に当ってはその都度溶解調整することが望ましい。溶解後放置すると効力が低下する場合があるので、なるべく調整当日に使いきる。
- ボルドー液等アルカリの強い薬剤との混用はさける。
- 本剤の使用に当っては使用濃度、使用量、使用時期、使用方法を誤まらないように注意し、特に初めて使用する場合は病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

【薬効・薬害等の注意】……………

●ぶどう

ぶどうには場合によってはサビ果の発生など、果実に障害が起こることがあるので、使用しない。

●かんきつ

〈落果防止〉

- 本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種などにより本剤に対する感受性が異なるので、初めての品種等に使用する場合は最寄りの指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認したうえで使用する。
- 果面の粗滑や果皮の厚さ等果実品質への影響

が懸念される場合があるので、使用時期、濃度は守る。

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

- 衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した樹には使用しない。
- 低温が続いた年（極端な低温の年）又は花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心がける。
- 散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布する。
- ジベレリンの使用濃度を2.5ppmで使用する時は、マシン油乳剤60～80倍に加用する。
- マシン油乳剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤の注意書きを確認のうえ使用する。

●温州みかん

〈浮皮軽減〉

- 本剤処理により着色が遅延することがあるため、貯蔵期間によって使用濃度を調整する。
使用濃度の目安
- ・貯蔵用又は樹上完熟の温州みかんでは、概ね3.3～5ppm
- ・貯蔵しないあるいは貯蔵期間が短い温州みかんでは、概ね1～3.3ppm
- 本剤処理により葉斑が残ることがあるため、使用に当たっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

- ジベレリンの使用濃度を2.5ppmで使用する時は、マシン油乳剤60～80倍液又は展着剤に

ジベレリン濃度	1000ppm	500ppm	400ppm	100ppm	50ppm	25ppm	10ppm	5ppm	1ppm
1ビン40ml（ジベレリン200mg含有）当りの水量	200ml	400ml	500ml	2ℓ	4ℓ	8ℓ	20ℓ	40ℓ	200ℓ
1ビン100ml（ジベレリン500mg含有）当りの水量	500ml	1ℓ	1.25ℓ	5ℓ	10ℓ	20ℓ	50ℓ	100ℓ	500ℓ

加用する。

○マシン油乳剤又は展着剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤または展着剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

●ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意する。

○異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がらないことがある。

○通常効果1果当り小型噴霧器で0.1～0.2ml程度を噴霧する。

●長門ユズキチ（無核）

○長門ユズキチの落果防止及び着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花又は効果から滴り落ちる程度に散布する。

●日向夏

○日向夏の無種子化及び落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花又は効果から滴り落ちる程度に散布する。

●かき

○散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなるおそれがあるので、十分注意する。

○本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行ない着果量を調節する。

○散布は効果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行う。

○品種により本剤に対する感受性が異なるので、下記に記載する品種以外に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所など関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認したうえで使用する。

「富有，早秋，太秋，新秋，甘秋」

●すもも（貴陽）

○授粉を行ってから散布する。

○薬液が付きすぎないように、処理後、枝や棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とす。

○第1回目の処理が早すぎると棘状の枝の発生が見られ、遅すぎると着果安定効果が劣る傾向があるので、所定の使用時期に使用する。

○本剤の散布により、結実が過多となった場合は、果実が小さくなる傾向があるので、予備摘果と仕上げ摘果を行い着果量を調節する。

●みつば（軟化栽培を除く）

○散布する場合、葉の表裏に十分付着させる。

○高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるの

で、秋作を中心に処理した方がよい。

●みつば（軟化栽培）

○灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。

○散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込みは心持ち加減する。

●セルリー

○定植後約1ヶ月以内に散布すると「す」が入りやすくなるので使用をさける。なお、スポット散布で使用する場合は1株当たりの使用液量が5～10mlが適量である。

●ふき

○収穫間近に散布すると効果が減少することがあるので、使用時期を誤まらない。

●畑わさび

○花芽分化前に処理しても効果が出にくいので、花芽分化開始を確認してから処理する。

○全面散布は効果が劣るので株の中心部に散布し、効果を高めるため必ず2回処理する。気温が5℃以下では効果が劣るので11月上旬からビニールなどで被覆し、保温管理する。また、15℃以上になると花芽分化が抑制されるので、15℃以上にならないよう温度管理には十分注意する。

●たらのき

○散布は散布ムラがないよう噴口の小さい散布器を用いて入念に行う。

○薬液が芽に均一にかかるよう、駒木の高さと芽の向きを揃えておく。

●春うど

○芽及び根株が十分したたる程度に散布又は瞬間浸漬する。灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。伏込み後の目土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさける。

●トマト

トマトの落果防止剤を使用した後散布すると効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、混用して使用する。

●いちご

〈着果数増加・熟期促進〉

○処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受けやすいので防寒に留意する。

○本剤の散布適期は休眠に突入して矮化がはじまる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待できないので、時期を失わないよう、いち

ごの生育状況に応じて散布時期を決める。また第1回目処理後、生育状況を見ながら必要に応じて追加処理をする。

○過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守する。

〈果柄の伸長促進〉

○処理したいいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出了頃寒波がくると特に寒害を受けやすいので防寒に留意する。

●ごぼう

○厳寒期は被覆資材等を利用して防寒に留意する。

○第1回目処理後、生育状況を見ながら必要に応じて追加処理をする。

●ばれいしょ

○種いも切断後の処理は葉害を生じるおそれがあるので、必ず種いもを切断せずに処理する。

○浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると葉害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。

○薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくと発芽遅延等の葉害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。

○種いもを切断する場合は処理した葉液が十分乾いてから行う。

○品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に葉効及び葉害を確認した上で使用する。

●種いも用ばれいしょ

○本剤は種いも生産用として原採種圃に植え付ける種いもに用いるものである。

○種いも切断後の処理は葉害を生じるおそれがあるので、必ず種いもを切断せずに処理する。

○浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると葉害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。

○薬剤処理した種いもは長時間濡れたままにしておくと発芽遅延等の葉害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。

○種いもを切断する場合は処理した葉液が十分乾いてから行う。

○薬剤処理した種いも及びその収穫物は食料又は飼料には使用しない。

○品種により本剤に対する感受性が異なるの

で、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に葉効及び葉害を確認した上で使用する。

●花き

○処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理には十分注意する。

○処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧する。

●チューリップ

〈開花促進〉

○本剤のチューリップへの利用は促成栽培（促成栽培、半促成栽培）に使用する。

○処理時期は草丈が7～20cm（適期：10～15cm）の頃である。

○ジベレリン溶液は筒状の葉の中心部に1回又は2回（7日おき）滴下する。滴下量が多くなると葉液があふれ通常は溜まる量が過剰分に引きづられて流出し、効果が不安定になるので注意する。

1.0mlの滴下であふれる場合は、保持される大量に止める。

○滴下前に灌水をすませ、筒状の葉の中の水はあらかじめ取り除いておく。滴下後は2～3日灌水をひかえる。

○品種により、感受性の差異が見られるので感受性の強い品種（ウィリアムピット、ゴールデンハーベスト等）を選んで使用するのが有利である。

〈花丈伸長促進及び茎の肥大促進〉

○本適用は促成栽培を対象とし、花丈伸長及び茎の肥大を促し「切花」の品質向上を目的とする。

○微量で鋭敏に作用し、過量の場合、花卉の奇形や肥厚の生育異常、葉や花の着色不良若しくは色抜けの生理障害などの葉害が発生しやすいので、使用時期、使用濃度及び使用方法を厳守し、滴下処理に際しては、液が葉筒内より漏出しないよう注意する。葉害回避には草丈7～8cmとやや早い時期の低濃度処理をこころがける。

○本適用の効果には品種間差異があるので、促成栽培品種であっても事前に最寄の指導機関の指導を受け、効果及び葉害の有無を確認してから使用濃度などを決める。

●てっぽうゆり

○球根の低温処理は8～13℃ 7週間とする

が、本剤によって発芽が早まる場合があるので、発芽状態を見ながら発芽が始まれば、7週間が経過していなくとも出庫する。

○本剤処理によって休眠が打破され発芽率が向上するが、発根は抑制される。従って定植時期が高温の場合は根の発育が悪くなり、その結果切花重量の減少などの障害を受けやすい。この高温障害防止策として次の処理をすることが望ましい。

- ・球根は100 g以上の大球を用いる。
- ・定植時よしずや寒冷紗の被覆などによって温度を下げるような管理をする。
- ・生育初期に2～3回尿素などの葉面散布剤の散布を行う。

○従来の温湯処理によって根ダニの発生を同時に抑えていたところでは、本剤の処理によっては根ダニの抑制効果はないので、殺ダニ剤などの利用によって発生を防止するよう留意する必要がある。

●りんどう

- 処理は葉が十分濡れる程度に散布する。
- 使用時期の定植直前は苗姿3～4対葉期を目安にする。
- 切株散布する場合は、翌年の萌芽に影響を与えないよう散布後は生育期間を十分に確保する。

●さつき

さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決める。

●ソリダゴ

○高温期の処理では効果を示さないので、低温期（11～3月）に処理する。

○処理により草丈および切り花重がやや低下することがある。

●さくら（切り枝促成栽培）

○休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理する。

【安全使用上の注意】……………

●本剤は眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意する。眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受ける。使用後は洗眼する。

●使用の際は農薬用マスクなどを着用する。作業後はうがいをする。

●浸漬処理に使用する際は不浸透性手袋などを着用する。



【適用と使用方法】

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン濃度)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の総 使用回数
か ん き つ (苗木、但し、 温州みかんを除く)	花芽抑制による 樹勢の維持	12～3月	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布	1 回	1 回
か ん き つ (不知火、ぼんかん、 かぼす、はるみ、 ワシントンネーブル、 日向夏、すだち、 平兵衛酢、 長門エズキチ(無核)、 温州みかん、 きんかんを除く)		収穫後～3月	2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳 剤60～80倍 液に加用)		
		収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
		落花始め～ 満開10日後		50～100 ℓ	散布		
不 知 火 は る み	花芽抑制による 樹勢の維持	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	2.5ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布	1 回	3回以内
		収穫後～3月		200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ～80倍液に加用)		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後	25～50ppm	50～100 ℓ	散布		
	水腐れ軽減	着色終期 但し、 収穫7日前まで	0.5～1ppm	50～500 ℓ	果実散布		
ぼ ん か ん	花芽抑制による 樹勢の維持	収穫後～3月	2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳 剤60～80倍 液に加用)	1 回	1 回
		収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後		50～100 ℓ	散布		
	水腐れ軽減	着色始期～ 4分着色期 但し、 収穫21日前まで	0.5ppm	50～500 ℓ	果実散布		

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン濃度)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の総 使用回数
長門ユズキチ (無核)	花芽抑制による 樹勢の維持	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250ℓ	立木全面散布 又は枝別散布	1回	1回
	落果防止	開花始め～ 満開10日後		50～100ℓ	散布		
	着果安定	開花期～ 開花終期	50ppm		花又は 果実散布		
	果皮の緑色維持	収穫予定 14～30日前	10～25ppm	50～400ℓ	果実散布		
す だ ち	花芽抑制による 樹勢の維持	収穫直後～収穫 約1ヵ月後	25～50ppm	50～250ℓ	立木全面散布 又は枝別散布	1回	1回
	落果防止	開花始め～ 満開10日後		50～100ℓ	散布		
	果皮の緑色維持	収穫予定 7～30日前	5～25ppm	50～400ℓ	果実散布		
平 兵 衛 酢 か ぼ す	花芽抑制による 樹勢の維持	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後		50～100ℓ	散布		
	果皮の緑色維持	収穫予定 14～30日前	10～25ppm	50～400ℓ	果実散布		
ワシントンネーブル	花芽抑制による 樹勢の維持	収穫後～3月	2.5ppm	200～700ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳 剤60～80倍 液に加用)	1回	1回
		収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	満開10～20日 後の幼果期	500ppm	30～40ℓ	幼果に散布		
日 向 夏	花芽抑制による 樹勢の維持	収穫後～3月	2.5ppm	200～700ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳 剤60～80倍 液に加用)		
		収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	無種子化 落果防止	満開7～10日後	300～ 500ppm	30～40ℓ	果実散布		
温州みかん (苗木)	花芽抑制による 樹勢の維持	11～1月	25～50ppm	50～250ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
			10ppm		立木全面散布 又は枝別散布 (プロヒド ロジャスモン 1000～2000 倍液に加用)		
			2.5ppm	200～700ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳 剤60～80倍 液又は展着剤 に加用)		

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン濃度)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の総 使用回数
温州みかん	花芽抑制による樹勢の維持	11～1月 但し、収穫後	2.5ppm	200～700ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳 剤60～80倍 液又は展着剤 に加用)	1回	3回以内
		収穫直後～ 収穫約1カ月後	25～50ppm	50～250ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
			10ppm		立木全面散布 又は枝別散布 (プロヒドロ ロジャスモン 1000～2000 倍液に加用)		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後	10ppm	50～100ℓ	散布 (プロヒ ドロロジャス モン1000～ 2000倍液に 加用)		
			25～50ppm		散布		
	浮皮軽減	収穫予定日の 3カ月前 但し、 収穫45日前まで	1～5ppm	100～400ℓ	果実散布 (プ ロヒドロロジャ スモン1000 ～2000倍液 に加用)		
きんかん	花芽抑制による樹勢の維持	収穫後～3月	2.5ppm	200～700ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳 剤60～80倍 液に加用)	1回	1回
		収穫直後～ 収穫約1カ月後	25～50ppm	50～250ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後			散布		
	着果安定	一番花開花期	300ppm	30～60ℓ	花に散布		
かき	落果防止	満開10日後	50～200ppm	30～100ℓ	幼果及びへた に散布		
すもも (貴陽)	着果安定	満開20～30日 後(第1回目) 満開50～60日 後(第2回目)	100～200ppm	20～50ℓ	果実散布	2回	2回
アセロラ	着粒安定	開花期	25ppm	100～400ℓ	花に散布	1花当 り1回	1花そう 当り3回 以内
野菜類	発芽促進	は種前	50～200ppm	—	種子浸漬	1回	1回
みつば (軟化栽培を除く)	生育促進	本葉2～3枚時 (第1回目)と その2週間後 (第2回目) 但し、 収穫14日前まで	10ppm	50～100ℓ	葉面散布	2回	3回以内 (種子への 処理は 1回以内、 は種後は 2回以内)

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン濃度)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の総 使用回数
み つ ば (軟化栽培)	生育促進	根株伏込時	20～50ppm	50～100 ℓ	根株上面に 散布	1 回	2回以内 (種子への 処理は 1回以内、 根株伏込 時は1回 以内)
ふ き		葉数3～4枚時 (草丈10～30cm頃)	25ppm	50～300 ℓ	全面散布		1 回
セ ル リ ー	生育促進 肥大促進	収穫予定 7～20日前	50～100ppm	20～200 ℓ /10a	葉面散布		2回以内 (種子への 処理は 1回以内、 は種後は 1回以内)
う ど ゐ (春うど)	休眠打破による 生育促進	伏込時	50ppm	1株当り 20～25 ml	根株散布		1 回
			50～100ppm	—	根株浸漬		
た ら の き (促成栽培)	萌芽促進		50ppm	100～200 ml / m ²	駒木散布		
さやいんげん (矮性(促成又は半促成栽培))	節間伸長促進	本葉0.5～1.5枚 展開時	5ppm	1株当り2ml	茎頂部散布	2回以内	3回以内 (種子への 処理は 1回以内、 は種後は 2回以内)
ト マ ト	空どう果防止	開花時	10ppm	1花房当り 5ml	花房散布(ト マト落果防止 剤と併用)	1花房当 り1回	種子への 処理は1 回、1花 房当り1 回
メ ロ ン	着果促進	開花前日～翌日	200ppm	1花当り 2～5ml	散布(4— CPA 剤50倍 液に加用)	1花当り 1回	種子への 処理は1 回、1花 当り1回
な す	着果数増加	開花時	10～50ppm	100～150 ℓ	葉面散布	1 回	2回以内 (種子への 処理は 1回以内、 は種後は 1回以内)
し そ (花穂)	穂の伸長促進 花径の伸長促進	出穂期 但し、 収穫5日前まで	5ppm	50 ℓ	茎葉散布	2回以内	3回以内 (種子への 処理は 1回以内、 は種後は 2回以内)
畑 わ さ び	花茎の抽出時期促進及び発生量増加	花芽分化後の10 月下旬(第1回 目)及び第1回 目処理後約10日 後の11月上旬 (第2回目)但し、 収穫60日前まで	第1回目 100ppm 第2回目 100ppm	1株当り 2ml	株の中心部に 散布	2 回	

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン濃度)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の総 使用回数		
い　ち　ご (促成栽培)	着果数増加 熟期促進	休眠に入る直前 (冬場の低温期)	10ppm	1 株当り 5 ml	茎葉全面散布	1 株当 り 6 回 以内	1 株当り 10 回以 内		
い　ち　ご	果柄の伸長促 進	頂花の出蕾直後 ～開花直前			株の中心部に 散布	1 花房当 り 1 回			
い　ち　ご (親株床)	ランナー発生 促進	採苗時ランナー発 生直前～発生初期	50ppm	1 株当り 10 ml	茎葉散布	1 株当 り 1 回	1 株当り 1 回		
ご　ぼ　う (促成栽培)	休眠打破によ る生育促進	休眠に入る直前 (残葉 2 枚程度の 頃) 及びその約 1 カ月後　但し、 収穫 30 日前まで	10～15ppm	50～100 ℓ		2 回以内	3 回以内 (種子へ の処理は 1 回以内、 は種後は 2 回以内)		
ばれいしよ	休眠打破による 萌芽促進及び 小粒いもの 増収	植付前	5～10ppm	—	30 秒間 種いも浸漬	1 回	1 回		
				250～300 ml / 種いも 10kg	種いも散布				
種いも用ばれいしよ	休眠打破による 萌芽促進及び 全粒種いもの 増収			—	30 秒間 種いも浸漬				
				250～300 ml / 種いも 10kg	種いも散布				
シ　ク　ラ　メ　ン	開花促進	9 月中・下旬	1～5ppm	1 株当り 2～5 ml	花蕾を含む芽の 中心部に散布				
プ　リ　ム　ラ (マラコイデス)		11 月上旬頃の 花蕾出現直後	10～20ppm		株の中心部に 散布				
みやこわすれ	開花促進	1 月中旬の保温 開始時から	50～100ppm	1 株当り 10～15 ml	葉面散布	3 回	3 回以内		
き　く し　ら　ん	草丈伸長促進	7～10 日間隔							
		生育期	25～100ppm	50～100 ℓ	茎葉散布	2 回以内	2 回以内		
		植付時	50ppm	—	30 分間株浸漬	1 回	1 回		
チューリップ (促成栽培)	開花促進	草丈 7～20 cm の 時に 7 日間隔	400ppm	1 球当り 1 ml	筒状の葉の中 心部に滴下	2 回以内	2 回以内		
	花丈伸長促進 及び茎の肥大 促進	草丈 7～10 cm 時	100ppm		ホルクロルフエ ニユロン 0.05～ 0.1ppm 液に 加 用 葉筒内に滴下				
てっぽうゆり (促成栽培)	休眠打破	低温処理前	1000ppm	—	30 秒間球根浸漬	1 回	1 回		
カ　ラ　ー	生育促進	植付時	50ppm		球根浸漬		2 回以内		
		花茎伸長期		50～150 ℓ	茎葉散布				
ア　イ　リ　ス		植付時	50～100ppm	—	球根浸漬		1 回		
スパティフィラム	開花促進	出荷予定期の 2～3 カ月前	250～500ppm	30～40 ℓ	茎葉散布				
トルコギキョウ	生育促進	生育期間中にロ ゼット化した時	50～100ppm						
ソ　リ　ダ　ゴ		活着直後 又は萌芽期	25ppm					1 株当り 1 ml	

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン濃度)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の総 使用回数
りんどう	発芽促進	は種前	50～200ppm	—	種子浸漬	1回	2回以内 (種子への処理は 1回以内、 は種後は 1回以内)
	生育促進	定植直前又は 定植1～5週間後	100ppm	50～150ℓ	茎葉散布		
		収穫後		1株当り 5～10mℓ	切株散布		
花き類 (りんどうを除く)	発芽促進	は種前	50～200ppm	—	種子浸漬	1回	1回
アザレア	開花促進	開花予定日 約1カ月前	250～500ppm	30～40ℓ	茎葉散布		
さつき (施設栽培苗)	茎の伸長促進 花芽分化の抑制	茎の伸長初期～ 伸長終期(開花 盛期以降)1～2 週間間隔	100～200ppm	50～100ℓ	頂芽に 十分散布	3回	3回以内
さくら (切り枝促成栽培)	休眠打破による 生育促進	休眠期	25～50ppm	50～200ℓ	切り枝全面散布	1回	1回
				—	切り枝浸漬		